

# 六花



俳句雑誌 りつか

2014 (平成26年)

cover design Yuna Mizuno

7

蛸やだれかさんと誰かさんは靴ぬれて  
蛸待つ 笠形山の暮れしぶり  
あしもとの風籠えきたる蛸かな  
きぬぎぬを承知で指をはふほたる  
ほうたるや真の闇にはあらねども  
蛸火のあふれてきたるたなごころ  
懐紙もて蛸袋を折りくれぬ  
とどまりて焰たてけり草蛸  
葉の先の一寸は闇ひめ蛸  
くさむらをしとねに恋の蛸かな  
ほうたるの橋を渡れば背のおもし  
ほうたるを爪から爪へ点しけり  
ほうたるに抜けたる闇のしつけいと  
わが息に一日の毒蛸の夜



ほうたるの火にぬれてきたなごころ  
十葉の花ほうたるにぼんやりと  
ほうたるに母との闇のよみがへる  
あさきゆめ指籠さしこに果てし蚩かな  
蚩に罪をそめたるをみなかなか  
ほうたるや笠形山を水分みくまりに  
ほうたるの闇に棚田のくづれけり  
手を離る蚩もつとも明るかり  
大勢と一人みてゐる蚩かな  
ほうたるをあふる風など吹いて来ず  
われよりも闇まちゐたる蚩かな  
ほうたるの闇のべとつきはじめたる  
ほうたるの合戦またたくまになえし  
ほうたるに嘘つきながらかへりけり

雪嶺抄

山 桜

笹村 政子

雪嶺を遠く車窓の山桜  
一軒家あり一本の山桜  
わたくしの空狭めたる花の雲  
城垣のくづれてもよし花吹雪  
芽柳や中洲を分かつ風の道  
闇動くときを待ち合ひ蛭狩  
青葉木菟ひと声のあと闇深む  
優曇華や戸板に猫の出入口  
昼寝覚水かげろうの消えてをり  
蛭のほどよき数を楽しみぬ  
捕らへたる蛭に雫あたへけり

# 一軒家あり一本の山桜

笹村 政子

いつけんやありいつぼんのやまぎくら ささむらまさこ

雪嶺を遠く車窓の山桜  
一軒家あり一本の山桜  
わたくしの空狭めたる花の雲  
城垣のくづれてもよし花吹雪  
芽柳や中洲を分かつ風の道

一軒家とは近くに人家がなく一軒だけ建っている家。その家に一本の山桜が見事に咲きほこっている。家の歴史を一本の山桜が語っている。この句をさらに簡潔に出来ないのだろうかと考えて見た。一軒一本という数字に誘導されて簡潔な作品と思わせられていないかと疑ってみたからだ。表現方法、好みによって少しは簡略化出来るような気もするが、これでいいと夢風撰に推薦。あとは好みの問題である。飯尾宗祇は「花に対して花を見、月に望みて月をあはれみ、当一念一念の風景をあはれみて、二念をとどめざるべきなり」と、『十口抄』で弟子（宗碩）に最後の古今伝授をしている。俳句の中にあれこれ詰め込まないのが極意というのだ。それは今も昔も。

# 絶え間なき落花の空の昏れにけり

藤生不二男

山国の城下寂れし花の昼

眠りて三鬼が郷のさくらかな

このあたり船頭町とふさくらかな

絶え間なき落花の空の昏れにけり

咲き満ちて今日を散りゆくさくらかな

たえまなきらつかのそらのくれにけり ふじお ふじお

こういうシンプルさがいい。つぎつぎと散りつづく桜を見上げながら日暮れる空に吸い込まれて行く。あれこれ言わないのが俳句。読者すなわち主人公がその場に居るように味わえる。間断なく散りつぐ桜。散りつぎながら日が暮れてゆく花時の空の潤いと切ない臆。桜の妖しに愚かれて桜ともにくれてゆく主人公の内面の憂いまで見えてくるではないか。夕桜もいいが散る花の夕暮れはもつといい。こういう句は深く、哀しい味わいを醸し出して作者のたましいを揺さぶっているのだろう。たんとんと木訥な表現の、これこそ不二男の世界なのである。

雪 卿 集

仔 猫

佐津のぼる

あたまだけ草むらに見え捨て仔猫  
啓蟄の土を蹴散らす放ち鶏  
耕しの鍬を休めず遠会積  
白壁に影をどらせて風の蝶  
子の蒔きし朝顔の種水攻めに

菊 若 葉

志 方 章 子

吾をにらむ術を知りぬし仔猫かな  
ムスカリにぶだうと叫ぶ子なりけり  
鳥の飛ぶ形に枝垂桜かな  
菊若葉はやくも虫の来てゐたる  
陽炎に立ちゐることに気づかざる

雪 卿 集

筍

永田万年青

筍の思ひのほかに深かりき  
筍の交互に皮をめくりをり  
春落葉歩まば小枝折れる音  
甲羅干手足伸ばせる春日中  
あめんぼの光をのこし消えにけり

花の色

松本文一郎

花の色風雨を凌ぎ黒ずみぬ  
翳りなばふと現れぬ花の精  
ほろ酔や行こか戻るか花の道  
陽炎やリムジン型の霊枢車  
春愁や反省猿の手の欲しき

雪 卿 集

シナリオ

梶浦玲良子

日と遊ぶ蝶々花びら数へつつ  
里山の猫背のつづく仏の座  
シナリオになき紅椿落ちにけり  
にじり寄るお国言葉や潮干狩  
村へ行く道はひとずち蝌蚪の岸

母と子

市川伊團次

良く鳴けり入学式の日の雀  
母と子の入学式の門の前  
残る鴨おまえも好きかこの川を  
残る鴨顔川中へ隠しをり  
町なかの川へ残れる鴨静か

## 雪樹集

多羅葉

升田ヤス子

多羅葉にうぐひす宛の手紙書く  
沼の香を覚まして発ちぬ春の鴨  
山桜人のまばらに来て仰ぐ  
刑務所の窓より花の見ゆるらむ  
誰もぬぬ御堂に甘茶いただきぬ

溝渕弘志

ダービーの儂き馬券風に舞ふ  
夏の海馬と散歩の親子かな  
夏帽子馬も被つてをりにけり  
蹴り上げる馬の蹄や夏の草  
若草に塗れて馬の休みをり

# 蛍雪譚

六甲選

\*俳句は天地神明に宿る。

二十六年七月号鑑賞

一軒家あり一本の山桜

笹村 政子

夢風撰

今月の政子の作品では、掲句がいちばん味わいがある。簡潔明瞭で読者にイメージを喚起させやすい。山中に一軒家があつてその家に一本の山桜があるというだけで、家の格式歴史などまで想像がふくらむ。一本を植えた主はすでに亡いであろう。その桜を後生大事に家人が守ってきた。桜は大木になつて枝を広げ、今は家を護っている。

秀句の条件に「簡潔で」「覚えやすい」「口ずさみやすい」「情景が容易に想像出来る」ことなどを備えていることだ。その点でこの句は優れていると思うからである。政子は俳句に悩んだ分だけスキルアップをしつつある。さくらは染井吉野でなく山桜がいい。「桜は山桜でなければ」と「桜守」（水上勉）の主人公、笹部新太郎（実在だった人）も断言している。

（以下略）

# 六花集

石垣の隙に入りたる柄長かな  
 ひとつぶの雨をとどめて花かたか  
 種漬の花畝に幾重も波なせり  
 日暮れには踊り出しけり  
 蟬の道はず踊り出してみたり  
 廣畑 育子

初蝶の登大路を横切り  
 ていねのい芽に打ち返しくる春の波  
 梅の香や谷町に石碑の多かり  
 亡父の背より高き塔婆よ春彼岸  
 平居 滯子

辛夷咲き中洲持ち上げぬたりけり  
 今落ちし椿輝きぬたりけり  
 風光るじようろの水を歪ませ  
 茹でられぬし魔法にかかると  
 干されぬし若布にかかると  
 住田千代子